

鴉、鴉、鴉——ポーとディケンズ、濡れ羽色の縁

Raven, Raven, Raven—the Glossy Jet Black Relationship between Poe and Dickens

松本 靖彦

東京理科大学

MATSUMOTO Yasuhiko

Tokyo University of Science

エドガー・ポーとチャールズ・ディケンズ。後世の人間からすれば、いずれも言わずと知れた文学史上の巨人であるこの二人は、ディケンズの初渡米の折にフィラデルフィアで直接、相まみえている¹。両者間の直接的な交友という点では、フィラデルフィアでの会見以外に両者が直接に会った形跡はなく、書簡のやり取りもごく僅かしかない。

その一方で、文学作品を介した関係については、両者の間にいくらか濃い繋がりが認められる。特に、ポーがディケンズから受けた影響に関してはテキスト上で確認しやすい。今後も両者の関係について新たな発見があることを望みたいが、これまでのところ分かっている範囲では、文学（研究）のうえで最も重要な接点にしても、史実の点でも興味深く、また現存する物証もある両者間の繋がりは、いずれも鴉にまつわるものである。本稿では、先行研究を基にポーとディケンズを結びつける3羽の鴉に焦点をあて、二人の（文学の）関係について考えてみたい²。

1. ポーによるディケンズ作品の書評

1羽目の鴉は、ポーが書評で扱っているディケンズ作品中の鴉である。

文壇での両者の関係は、ポーがディケンズという作家の高い資質に注目したところから始まる。ポーこそはアメリカで最初にディケンズの真価を認めた文人とされているが、その評価が発表されたのは、彼が自ら編集を手がけた雑誌に掲載したディケンズ作品の書評によってであった。

ポーは、1836年6月、『サザン・リテラリー・メッセンジャー (Southern Literary Messenger)』誌（以下『メッセンジャー』）に『ワトキンズ・トトルその他のスケッチ集 (Watkins Tottle and Other Sketches)』（『ボズのスケッチ集 (Sketches by Boz)』の米国版）の書評を発表したのを皮切りに、同じく『メッセンジャー』に『ピクウィック・クラブ (Picwick Papers)』の書評（1836年11月）を、そして1841年5月には『グレアムズ・マガジンズ (Graham's Magazine)』誌（以下『グレアムズ』）に『ハンフリー親方の時計 (Master Humphrey's Clock)』の書評をと、立て続けにディケンズ作品の書評を発表している。

いずれの書評にも、ポーが高い関心と敬愛の念をもってディケンズ作品を精読したことが見て取れ、洞察に富む分析が散見する一方、自身の文学観に照らし合わせて不満な点を遠慮なく指摘している。この時期（1830年代後半～40年代前半）は、ポー自身の執筆において「創作活動の力点が詩から散文へと決定的に変化」した期間にあたるが（野口13）、ディケンズはまさにこの間に文壇に登場し、英米で名声を博す著名作家に成長していったのであり、ポーもまた作家として大成していくディケンズの筆致を熱心に追いつつ、散文作家としての自己形成を成し遂げていったのだった。

ポーの書評について特筆すべきなのは、それが対象作品の鋭い分析だけでなく、多分に自身の創作・批評原理を披歴する場となっていることである。つまり、ポーの書評はそこ

で扱われている作品以上に、彼自身の文学（的価値観）についても教えてくれるのである。そんなポーの書評でディケンズ作品を扱ったもののうち、彼独自の切れ味満点の洞察（尤も、自信をもって深読みをするあまり、的を外しているところもあるが）についても、ポーとディケンズの文学的繋がりについても、最も重要な情報を含んでいるといえるのはミステリー仕立ての歴史小説、『バーナビー・ラッジ (Barnaby Rudge)』（以下『バーナビー』）についての書評である。

ポーは『バーナビー』の書評を2度書いている。イギリスでは、ディケンズが編集した週刊誌『ハンフリー親方の時計』に連載された同作品だったが、国際著作権の確立していなかった当時のアメリカでは、イギリスに少し遅れて海賊版の連載小説として出版されていた。まず、ミステリー仕立ての『バーナビー』の連載がまだ早い段階の1841年5月1日、ポーは「先取り論評 (“Prospective Notice”）」と題した『バーナビー』の書評を『フィラデルフィア・サタデー・イーヴニング・ポスト (Philadelphia Saturday Evening Post)』紙に発表した。これがポーによる『バーナビー』1本目の書評である。

その中で、物語の柱となる殺人事件の真犯人の正体や、犯人（ひいては著者のディケンズ）が用いた主なトリックをポーが見事に言い当ててみせたことは、よく知られている。また、そのことを知って、ポーの恐るべき慧眼に度肝を抜かれたディケンズが「その男は悪魔に違いない (“the man must be a devil”）」と漏らしたという逸話もある³。

そして、この小説の連載が完結し、物語の全貌が明らかになってから、自分の見立ての合っていた部分と（ポーの予想は全体的中したわけではなかったのに）外れていた部分の詳細な解説を軸に作品に対する総合的な評価をまとめたのが、ポーによる『バーナビー』2度目の書評である（1842年2月、『グレアムズ』に掲載）。これらの文章がディケンズの小説の推理小説的側面に焦点をあてているからには、『バーナビー』のミステリー展開についてのポーの推理の筋道の適格さや洞察の見事さ、そして彼の推理が外している点等に焦点をあてるのが本来的な読み方なのだろうが、ここではあくまでポーとディケンズの繋がりについて教えてくれる鴉に着目したい。

2. ポーの美意識を通して見たディケンズの鴉

ポーの『バーナビー』書評2連作の両方に、この作品に登場する鴉のグリップへの言及がある。まず、1度目の書評においてポーは、ディケンズが物語の後の展開を暗示する仕掛けをどのように小説の細部に織り込んでいるかという点について、自分の穿った読みを披歴しつつ、主人公バーナビーと相棒のグリップを独自の解釈から評価している。ポーはラッジ夫人の家こそが物語の重要な舞台となるであろうという予想をたて、その理由を述べる文脈で以下のように語る：

この鴉の鳴き声は、今後の物語の展開の中で、頻繁に、適切な形で、予言の響きを帯

びて聞かれることになるはずである。そして、この鴉という登場人物それ自体が丸ごと主人公の阿呆に対して、音楽において主旋律に対して伴奏が果たす役割を多分に果たすこととなるだろう。両者それぞれの特徴は際立っており、互いにはっきり異なっている。それでいて、両者の間には強い類似関係があり、それぞれ別個の存在でありながら、いずれを欠いたとしても不完全になってしまうであろう1つの全体というものを構成しているのだ。(Essays 222)⁴

バーナビーと常に親しく行動を共にする掛け替えのない仲間同士であり、剽軽で愛嬌のあるグリップは、断片的ではあっても時宜を得た台詞を発声してみせるので、確かに人間臭いキャラクターではあるが、この鴉が賢明な読者にミステリーの展開を暗示するうえで重要な役割を果たす存在となるに違いないとみるのは、ポーの側でのかなり踏み込んだ解釈である。特に、連載初期段階の『バーナビー』を見る限りでは、オウムの口真似のようなレパトリーの繰り返しで、基本的にはコミカルな役どころだと思えるグリップの鳴き声が、「予言の響きを帯びて聞かれることになる (“are to be . . . prophetically heard”）」(Essays 222) という予想は、抗いがたい運命の不吉な予兆を多く描いたポーらしい穿った読み方だといえよう。

ポーは、鴉と主人公を一心同体のペアとして造形したディケンズの創意を高く評価しているが、それは取りも直さず、鴉のグリップというキャラクターの導入を評価していることになる。「それぞれ別個の存在でありながら、いずれを欠いたとしても不完全になってしまうであろう1つの全体というものを構成している」と言うポーが、『バーナビー』に鴉のグリップが登場していなかったとしたら、てんで駄目だった(失敗作だった)ろう、と示唆しているに等しいからである。生まれつき知能が低いとされ、一見とりとめのないことを口走っているようでいて(ポーの解釈によれば)唐突に事件の核心に迫るような事柄を口にするバーナビーのうちに、優れて独創的な人物造形をポーは認めている(Essays 219, 221-22)。だが、そんな主人公の傍に鴉の相棒がいるのといないのではまるで違う。バーナビーと常に掛け合い漫才のように絡み合う鴉のグリップの存在が、物語をはるかに躍動的で奥行きのあるものにしていく。ディケンズの鴉について、ポーは実質的にこのような肯定的な評価を下しているといえる。

鴉と対になった主人公の人物造形に対するポーの賛辞はこれに留まらない。そこにこそディケンズの天才の証が認められるのだと言うポーは、先に引用した個所に続けて次のように述べる：

これ [バーナビーとグリップが一心同体の存在として設定されたこと]こそ明らかにディケンズ氏が意図したものなのだ——本人はそれにまだ気づいていないのだが。実際、この構想は美しく、驚くほど独創的でもあるが、それは芸術上の知識や熟考によ

ってというより、選択の余地なくそうでしかありえないものであり真実であるものを直感的に探りあてることによって得られたに違いないのだ。それこそ天才の第六感というべきものである。(Essays 222-23)

この論述で展開するポーのディケンズ評価には、2つの見逃せない特徴がある。

1つ目は、ポーが評価している人物造形における創意について、ディケンズ自身はそれがどれだけ優れた意匠であるか（少なくとも、このポーの1本目の書評が対象としている連載部分までは）自覚していないと断言している点である。著者本人にも見えていない作品の重要な要素が自分には見えているのだ、とポーは言っているのであり、そこにはディケンズ本人よりも自分の方が彼の作品の成り立ちを正確に解析できている、という自らの眼識への相当な自負が窺える。これは、分析対象となった相手の死角や無意識の行動レベルにまで踏み込んだ読解であり、「盗まれた手紙 (“The Purloined Letter”）」(1844)の探偵デュパンを彷彿とさせる。その意味で、とてもポーらしい態度だ。

もう1つ、ここでのポーのディケンズ評価について特筆すべきなのは、ポーが着目したディケンズのこの創意が、理知的な説明を介さず全く自明のこととして、超人的・超自然的な域に通じる天才の顕れとして捉えられていることだ。2本目の『バーナビー』書評は、この作品の具体的な検討に入るに先立ち、あらゆる書評の前提となる彼の批評原理——そもそも批評とは何か、批評とは何をすることか、ということについての彼の考え方の確認から始まる。その中でポーは〈真の卓越や美は自明の存在であって、説明を要さず、一目でそれと判別できる。従って、批評の役割はそれらを説明することではなく、完全に称賛に値するものになるにはどこが足りないか、作品の欠点を指摘することにある〉という趣旨の、彼の批評の中核にある確信を披歴している (Essays 226-27)。1本目の書評において、鴉絡みの人物造形にみられるディケンズの着想に対し、ポーが〈見れば分かる、これは解説不要の紛れもない天才のなせる技だ〉と断定し、ディケンズを至高の領域へと押し上げるとき、彼は完全に自分のセオリー通りの批評を実行しているのである。

殺人事件をめぐるミステリーの作者は想像上・テキスト上の殺人者といえるので、その小説のプロット展開や犯人の予想をすることは、当然、事件の真相を追う探偵さながらの行為となる。ミステリー小説『バーナビー』についての1本目の書評においても、ポーの究極の目的はテキスト上の殺人者・隠蔽者ディケンズの「犯罪」を暴くことにあるので、この短い書評文において彼がしていることの大部分は、ディケンズがテキストの細部に残さざるを得なかった痕跡を基に、彼の意図や動機を理知的に綿密に推理することである。

ところが、彼がディケンズの鴉の声はいずれ「予言の響きを帯びて聞かれる」ことになるに違いないと読むとき、また鴉と対になった主人公の人物造形にみられる作者の創意を第六感を用いた天性のものともみるとき、つまりは作品の細部に超自然的領域へのリンクを

見出すとき、ポーは理知的な考察を経ず、それらの卓越性を自明のものとしている。このように、ディケンズ作品の鴉に関わる人物造形に関しては、ポーは推理によらず直感的に評価している点が興味深い。

3. ディケンズの鴉へのポーの失望

しかし、それにも増して（ポーのディケンズに対する態度を知る上で）興味深いのは、『バーナビー』連載完了後に、鴉のグリップが自分の予想通りのキャラクターに発展しなかったことを知ってからのポーの反応である。

『バーナビー』2本目の書評においてポーは、彼がディケンズの才能を高く評価し、小説の展開に期待したがゆえの数々の失望について縷々述べている。バーナビーが生来、血を見ることを極端に恐れることを、この物語のミステリーを解く極めて重要な伏線、とりわけ殺人犯の正体を暴露する決定打としてディケンズが効果的に用いるに違いないと踏んでいたポーは、実際の小説の展開に心底がっかりし、「ここにおいて何という素晴らしい機会をディケンズ氏はふいにしてしまったことか！」と嘆いてみせる (*Essays* 243)。単に自分の予想が外れたことが残念なのではない。ポーは、ディケンズが自分の予想通りの作劇さえしていれば、物語の展開は「私たちが『詩的正当性』に適っているとみなす着想の、考え得る限り最も精妙な具現化の一例」となっていたに違いないのに、そうならなかったことが惜しくて仕方がないのである (*Essays* 243)。最高水準の芸術を産み出す才能のあるディケンズが、その稀有な機会を手にしていながら、それをみすみす放棄してしまった、何ともったいないことだ！というポーの思いがその失望の出所である。

これと同様に、「詩的正当性」の観点からすればディケンズは当然こうすべきだったのにしなかったという理由で、『バーナビー』の人物造形の残念な点として彼が列挙する項目の最後に挙げられているのが、鴉のグリップの物足りなさである。ディケンズの鴉は結果的にポーにとっては期待外れだった。「この鴉にしても、このままでもかなり面白くはあるのだが、今私たちが目にしているのよりもっと大きな活かし方ができた」 (*Essays* 243) ことを指摘するポーは、「この鴉の鳴き声が、物語の展開の中で、予言の響きを帯びて聞かれることになってよかったはずである (might have been prophetically heard)」と続ける (243; 強調は原文)。そして、その後、第1本目の書評で提示した自らの読み(先に引用した部分の「この鴉という登場人物自体が」以降)をほぼそっくりそのまま繰り返して、裏切られた予想として提示している。

ここでのポーのディケンズの鴉への反応は、二人の繋がり——主に前者の後者への関わり方——について以下のような重要な示唆を与えてくれる。

まず、ここまでやれたはずなのにやらなかった、というディケンズの鴉（の人物造形）への失望は、ポーの側での彼に対する深い敬愛と高い期待の表れであると同時に、両者の文学的価値観の違いを浮き彫りにしてもいる。ポーの失望は、ディケンズが才能を全力で

発揮したら、彼の作品はこんな水準に留まることなくもっと凄いはずだ、という大きな期待と裏腹のものである。要するに、彼は実際に発表された作品以上にはるかに理想的で完全無欠なディケンズ作品の姿を思い描いているのである。これは、一方ではポーのディケンズに対する強い思い入れであり愛情の発露だといえるだろうが、他方では、究極的にはポーはディケンズ作品にはどこか不満を覚えないではいられない、ということでもある。ディケンズが最終的に彼自身の判断で採った選択と、ポーの「詩的正当性」が彼に求めさせずにはおかない、作品のあるべき姿が随所で異なるのは、そこにおいて両者の文学の方向性、文学的価値観の違いが顕れていることに他ならない。

ディケンズの鴉がポーが期待した通りの予言をせずには終わりに、結果的に彼が肩透かしを食らったことは、扱う主題や設定に共通する点（推理や殺人者の心理、恐怖等）の多いポーとディケンズではあっても、重要な点で二人の文学的価値観が決定的にすれ違うことを、この書評が書かれた段階で予兆してはいないだろうか。これまでの研究からすれば、ポーがディケンズの初期作品を熱心に精読したことは確かな一方、ディケンズがポー作品をどれくらい熱心に読み、ポーからどんな影響を受け、何を吸収したかは見えにくい。ポーがディケンズに『グロテスクとアラベスクの物語 (The Tales of the Grotesque and Arabesque)』(1839)を進呈し、自著のイギリスでの販路を開拓するうえで足がかりとなる出版社の斡旋を求めたことは知られている。ポーが期待した成果は得られなかったにしても、その後ディケンズはポーのために幾つかの出版社にあたっているようだし、『グロテスクとアラベスクの物語』を含め、ポーの作品にディケンズが触れていないはずはないと思われるのだが。

ポーがディケンズの世界にのめり込み、食い込んでいったほどには、ディケンズがポーの世界にひきこまれた形跡は確認できない。両者とも雑誌編集に携わっており、英米で話題になった作品には目が利いたと思われるが、それぞれの存在が文壇で認知され始めた時期が異なることから、互いの作品に出合う機会も等しくはなく、相手への関心度にみられるこの不均衡は歴史的条件からくる当然の結果といえるかもしれない。それでも、特にポーの生前中の両者の関係について考えると、ポーがディケンズを深く理解したほどには、ディケンズはポーを理解していなかった印象をもたざるを得ず、二人の相互評価には一貫して不均衡があったとみられる。ポーの美意識を通して見たディケンズの鴉。その姿から予言的に (prophetically) 読み取れるものがあるとするならば、それは二人の関係の——いずれは大事な所ですれ違うことにならざるを得ないという——その後の運命ではないだろうか。

しかし、ディケンズの鴉が自分の期待通りの発展を遂げなかったことに対するポーの失望は、二人の文学的価値観の差異を示唆するものであると同時に、彼の旺盛な創造力 (creativity) の発露でもある。

ディケンズの創作結果にポーが満足することができなかったのは、単に両者が目指して

いる文学が違うからだけでなく、ポーにはディケンズ自身にも見えていないディケンズ文学の可能性が見えていた（と彼が信じていた）からである。真相を解き明かす名探偵が、殺人犯人の心理と行動を推理し、正確にたどることにより、想像の中で犯人と同じ殺人を犯す（再現する）のと同様、ディケンズの筆致をつぶさになぞるポーは、その（犯行現場ならぬ）執筆現場に立ち会い、執筆過程を追体験しているのである。つまり、ポーは『バーナビー』の一読者として連載小説を消費する読み方ではなく、著者の影、分身であるかのようにディケンズにぴったりと付き従い、同作品を一通り「書いて」いるといえる。そのディケンズ追跡体験を通じてポーは、「詩的正当性」に照らし合わせたとき、ディケンズが随所で最善の選択をしていないことが目について仕方なかったわけである。

それだけではない。現行の『バーナビー』を、その理想形に近づけるための道筋がはっきり見えていると自負するポーは、ディケンズ作品を半ば私物化しているといえる。鴉のグリップについて、「このままでもかなり面白くはあるのだが、今私たちが目にしているのよりもっと大きな活かし方ができた」と指摘する彼は、暗にディケンズ本人よりも自分の方が理想のディケンズ作品を書く方策を知っている、と言っているようなものだからである。その気になれば、ポーはディケンズの鴉をより「詩的正当性」に適った姿に書き改めることができたのだ。

4. ディケンズの鴉を書き直すポー

そして、ポーは実際にディケンズが描いた鴉を書き直し、自分好みの鴉——超自然的・霊的世界に通じていて、啓示的な響きを帯びた声で鳴く鴉——へと生まれ変わらせているといえる。それがポーの詩「大鴉」（1845）であり、本稿で扱う2羽目の鴉である。

ポーが「大鴉」の着想をディケンズの『バーナビー』に出てくる鴉のグリップから得ていることは、既に複数の先行研究が指摘している通りほぼ間違いないとみてよいだろう⁵。ポー自身は「構成の哲理（“The Philosophy of Composition”）」（1846）の中で、彼がどのようにして「大鴉」の鴉の着想を得たかを事細かに説明することで、暗にそれを否定しているけれども、グラブ（Gerald G. Grubb）も指摘しているように、ディケンズの鴉とポーの大鴉との強い類縁関係はテキスト間の明らかな類似によって容易に証明され得るであろう（Grubb, “Part Three” 209-12）。既にグラブによる8項目にも渡る詳細な検証報告がなされているので、ここではそれぞれのテキストからの引用を1組だけ例示したい。

まず、以下にポーの「大鴉」の第16連を引用する：

『予言者め！』私は言った、『悪なる者！——鳥か魔神か、ともかく予言者よ！——
我等の上に穹窿をなす天に誓って——我々の共にあがめる神に誓って——
悲しみの重荷に悩むこの魂に教えてくれ、かの遠いエデンの苑に、
天使らがレノアと名づけた清い乙女を、わが魂の抱く日^{いだ}が来るかどうかを——

天使らがレノアと名づけた世に稀な光りかがやくその乙女を——
鴉は答えた、『最早ない』（『詩と詩論』159）

『バーナビー』の書評においてポーが語っていた「予言の響き」を帯びた声で鳴く鴉がここにいる。不吉な、しかし抗いようのない定めを主人公に告げ知らせる鳥だ。冥界か霊界か、いずれかは分からないけれども、超自然的な世界と繋がりのある鴉に違いない。

次に、ディケンズの『バーナビー』第73章から引用する。ジョージ・ゴードン卿の反乱に加わったかどで捕えられ、牢に監禁された息子のバーナビーと鴉のグリップを訪ねてきたラッジ夫人が、彼らの収監がそれほど長くは続くまいと願っているという希望的観測を口にし、それに対してバーナビーが答える場面である：

「願って！でもお母さんが願ってもこの鎖は外れないよ。このぼくが願っても、全然鎖のやつ平気なんだもの。グリップが願っても——だけど誰がグリップなんかにかまってくれるものか」

鴉は短く陰気にかあと鳴いた。彼なりに精一杯はっきりと「誰もいない」と言っていた。

「お母さんとぼくの他、誰がグリップなんかにかまってくれるもんか」バーナビーは鳥の乱れた羽根を手で揃えてやりながら、「ここじゃ何もしゃべらないんだよ。牢屋の中じゃ一言も言わないで、暗い隅っこに一日中座って陰気な顔をしてるんだ。……でも、誰がグリップなんかにかまってくれるもんか」

鳥はまた鳴いた——誰もいない。（『バーナビー』小池訳 782-83）

主人公の問いかけに対して、片やディケンズの鴉は「誰もいない (Nobody)」、ポーの大鴉の方は「最早ない (Nevermore)」と鳴き、それぞれの言葉がリフレインとして響いている。ディケンズは、主人公の問いかけに対して鴉が否定語で答えるという文体上のリズムを繰り返している。この（ここで音楽の言葉を借りるのだが）「主題」はディケンズの発見だったと思われるし、それはこの場面で興味深い陰鬱な効果を上げている。しかし、その主題に（当のディケンズですら気づいていない）「詩的正当性」に強く訴えるものを見出したのはポーの感性であり、彼はバーナビーとグリップが奏でていた主題を転調させ、オリジナルよりも愁いの濃い幻想的な旋律へと磨き上げてみせたのだった。いうなれば、ポーはディケンズが編んだ粗削りで骨太な散文のうちに黒光りする詩の原石を発見し、それを掘り出して韻文の工芸品へと彫琢したのである。これは鴉を媒としてポーとディケンズの間が生じた幸福な文学的^{なかだち}化学反応といえるのではないだろうか。

5. グリッパ大西洋を渡る

これまで見てきたように、ポーとディケンズ本人同士は親しく交友する機会に恵まれた間柄ではなかった一方で、彼らの文学の間には鴉を介した濃い繋がりが認められる。

しかし、両者の間には他にもまだ鴉が結ぶ奇縁があるのだ。それはディケンズがペットとして飼っていた実在の鴉——これが本稿が扱う3羽目の鴉である——による両者の繋がりにある。

『バーナビー』に登場するグリッパの描写は、ディケンズが飼っていた鴉がモデルになっていたことは、チャールズ・ディケンズ版全集の序文（1868）で著者本人も触れており、広く知られているところだ。ピルグリム版書簡集によれば、ディケンズは生涯3羽の鴉を飼っており、『バーナビー』のグリッパのモデルとなったのは初代と3代目の鴉なのだという（524）。

しかし、たいそうな芸達者だったらしい3代目の鴉の特徴——ディケンズも「その悪魔的ユーモアにおいて恐ろしいときがある」と評している（*Letters* 438）——もいくらか含まれていたにしても、『バーナビー』に登場する鴉について、その着想から造形において決定的な存在だったのは愛嬌たっぷりの初代の鴉、小説と同名のグリッパだったに違いない。ディケンズの娘のメイミーもそう考えているし、「父が『グリッパ』を愛したように他の鴉を愛したことはありませんでした」と述懐している（78）。ピルグリム版書簡集の編者たちも、ディケンズ自身が「グリッパ」と呼んでいることが確認できるのは初代の鴉のみだと指摘している（524）。『バーナビー』連載途中で彼女（実は雌であったことが分かっている⁶）が死んだ際、よほどこの別れが忍び難かったのか、ディケンズが業者に頼んで彼女を剥製にしてもらい書斎に置いたという事実も、グリッパが彼にとっていかに特別な存在であったかを示している。

しかし、その一方で、このグリッパが『バーナビー』という作品を経由して、ポーの「大鴉」の靈感の元にもなったことを考えると、彼女はディケンズの専有物ではなくポーにも所縁のある鴉だといえる。そして実際この剥製となったグリッパは、ディケンズの死後、二人の作家間の文学的因縁に導かれるかのように海を渡り、ポーと関わりの深いフィラデルフィアの地に引き寄せられるのである。

ディケンズの没後、彼の他の遺品ともどもグリッパの剥製も競売にかけられ、様々な所有者の手を渡り歩いた末、蒐集家ギンメル大佐（Colonel Richard Gimbel）のものとなる。そして、1970年（ディケンズ没後100年の年）に大佐が亡くなると、グリッパは大佐のポー・コレクションの品々と共にフィラデルフィアの図書館（Free Library of Philadelphia）に寄贈されたのであった⁷。ポーとディケンズ、二人の文学の間に鴉を介した接点があることは既にみた通りだが、彼らの死後長い時間が経過してからも改めて鴉が二人を結び合わせているのは興味深い。しかもこの繋がりをや、形見である愛鳥の剥製——有態に言えば愛する者の死体である——を通じてのものである。何と面妖な絆であることか。

以上、ポーとディケンズとの繋がりを考えるうえで重要な3羽の鴉についてみてきた。ポーがディケンズの初期作品を熱心に味読したこと、また両者の文学的関心に共通点が見られることから、この二人の比較・対照研究は豊かな知見をもたらしてくれそうでいながら、いかんせんポーが短命であった上に両者間の交友は乏しい。二人の接点は圧倒的に少ないと言わざるを得ず、新たな発見をするのは容易ではなさそうだ。

そんな中で、ディケンズの『バーナビー』とポーの「大鴉」は、二人の文学的感性が鴉の形象を介して連結する瞬間が確かにあったことを示しているし、フィラデルフィア無料図書館に収められた剥製のグリップは、この二人の世界の間には彼らの死後も朽ちない絆があることを証している。従って、少なくともこれだけは言えるのではないか。ポーとディケンズは濡れ羽色の因縁で確かに結ばれているのだ、と。

注

- 1 ポー自身はディケンズとの2度目の会談があったと言っているが、傍証がないためポーによる捏造の可能性が否めない (Moore 283)。
- 2 本稿で参照した、ポーの書評と「大鴉」との関係に触れた先行研究について一言触れておく。コプリーとヘイズは、ポーによるディケンズの『バーナビー・ラッジ』書評の1本目と2本目とで、同作品に登場する鴉に対する論点が微妙に変化していることに着目し、そこにポーがディケンズの鴉を巧く書き直す術を考えるようになった契機を見てとっている (192)。それよりもう一步踏み込んだ主張をしているのがムーアで、『バーナビー・ラッジ』2本目の書評でディケンズの鴉に対して自分が指摘した欠点を改めて書き直したのが、自作の「大鴉」なのだと述べる (280)。本稿では、これら先行研究による端的だが簡潔な言及に過ぎない指摘を敷衍して論じた。
- 3 アレンによるポーの伝記が出所の非常に面白い逸話だが、残念ながら真偽は定かでない (Allen 511; Grub, “Part One” 9; 佐々木 211)。
- 4 本稿での英文からの引用文は、既訳を使用した場合はその旨を記した。それ以外の場合は拙訳による。
- 5 ポーの「大鴉」へのディケンズの影響については、それを初めてはっきりと指摘した1911年1月15日付の『ピッツバーグ・ポスト (Pittsburgh Post)』紙掲載の記事 (“Poe’s” 153-54)、クラブによる綿密な比較 (209-12)、およびガルバンによる分析 (17-19) を読めば十分な理解が得られると思われる。
- 6 Free Library of Philadelphia ホームページのブログへの Joe S. による投稿 (2018年12月3日付) を参照。
- 7 Free Library of Philadelphia ホームページ、所蔵品情報 (“Photograph of Grip”) による。

参考文献

- Allen, Hervey. "Chapter 20." *Israfel: The Life and Times of Edgar Allan Poe*, vol. 2, 1926, pp. 481-518, *Edgar Allan Poe Society of Baltimore*, www.eapoe.org/papers/misc1921/hva26220.htm.
- Dickens, Charles. *Barnaby Rudge*. Ed. Donald Hawes. Everyman, 1996.
- , *The Letters of Charles Dickens*. Ed. Madeline House et al, vol. 2, Clarendon, 1965-2002.
- Dickens, Mamie. *My Father as I Recall Him*. *Charles Dickens: Family History*, edited by Norman Page, vol. 1, Routledge/Thoemmes, 1999, pp. 1-128.
- Galván, Fernando. "Plagiarism in Poe: Revisiting the Poe-Dickens Relationship." *The Edgar Allan Poe Review*, vol. 10, no. 2, 2009, pp. 11-24. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/41507876.
- Grubb, Gerald G. "The Personal and Literary Relationships of Dickens and Poe (Part One: From "Sketches by Boz" through "Barnaby Rudge.")" *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 5, no. 1, 1950, pp. 1-22.
- , "The Personal and Literary Relationships of Dickens and Poe (Part Three: Poe's Literary Debt to Dickens.)" *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 5, no. 3, 1950, pp. 209-21.
- Joe S. "Grip, Philadelphia's Pet Raven." *Free Library of Philadelphia Blog*, 3 Dec. 2018, libwww.freelibrary.org/blog/post/3554.
- Kopley, Richard, and Kevin J. Hayes. "Two Verse Masterworks: 'The Raven' and 'Ulalume.'" *The Cambridge Companion to Edgar Allan Poe*. Ed. Kevin J. Hayes. Cambridge UP, 2002, pp. 191-204.
- Moore, Tara. "Charles Dickens." *Edgar Allan Poe in Context*. Ed. Kevin J. Hayes, Cambridge UP, 2013, pp. 279-87.
- "Photograph of Grip." *Free Library of Philadelphia*, libwww.freelibrary.org/digital/item/38701.
- Poe, Edgar Allan. *Edgar Allan Poe: Essays and Reviews*. Ed. G. R. Thompson. Library of America, 1984.
- , *The Complete Tales and Poems of Edgar Allan Poe*. Penguin, 1982.
- "Poe's 'Raven' and Dickens's 'Raven.'" *The Dickensian*, vol. 17, no. 3, 1921, pp. 153-54. *ProQuest*, www.proquest.com/scholarly-journals/poses-raven-dickens/docview/1298942929/se-2.
- 佐々木徹『ことば、ことば、ことば——小説の英語を味読する』大阪教育図書、2022年。
- チャールズ・ディケンズ著、小池滋訳『バーナビー・ラッジ』『集英社ギャラリー [世界の文学] 3 イギリス II』集英社、1990年、299-852頁。

野口啓子「ポーと雑誌文学」野口啓子、山口ヨシ子編『ポーと雑誌文学——マガジニスト
のアメリカ』彩流社、2001年、9-31頁。

E・A・ポオ著、福永武彦他訳『ポオ 詩と詩論』東京創元社、2012年。